

親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅲ ：愛着および親の養育態度の検討

大井 京子*, 西村 純一**, 井森 澄江***, 井上 俊哉****, 斉藤こずゑ*****
(平成 17 年 10 月 6 日受理)

Life-span Development Psychological Study of the Relationship of Parents and their Children III ： Examination of Attachment and Parental Child-rearing Attitudes

Ooi, Kyoko NISHIMURA, Junichi IMORI, Sumie INOUE, Shunya and SAITO, Kozue
(Received on October 6, 2005)

キーワード：生涯発達心理学的研究, 親子関係, 愛着, 養育態度, 年代差

Key words : Life-span development psychological study ; relationship of parent and their children ;
attachment ; child-rearing attitude ; a generation gap

問題と目的

戦後60年を経て、平均寿命の延長やライフスタイルや、産業構造の変化等に伴い、家族の形は多様化しつつある。1990年代以降1人暮らしの世帯が全世帯の2割をしめ、児童のいない世帯は7割を超えてきている(安治, 2004)。このような少子高齢化のなかで、以前は家族の主な機能であった「生み育てる」といった養育、養護の機能が変化し、これまでに表立って取り上げられてこなかった問題が顕在化しつつある。児童相談所における虐待相談処理件数は平成9年から14年の間に4倍に増加し、老人虐待などの事件も目にするようになった。このような背景を考えると、家族の中の親子関係、とくに、少子化が進むなかでの乳幼児期の子どもの養育養護と関連した「親と子」、高齢化社会が進むなかでの中高年期の親の養護介護と関連した「親と子」の様相を明らかにしていくことは、現在の家族が抱える問題の一助となると考える。

親子関係や家族について考察を進めるにあたり、様々な理論が存在するが、その中の一つに Bowlby (1969, 1973, 1980) によって提唱された愛着理論がある。愛着

とは、子どもは重要な養育者との間に情緒的な心の絆を持ち、そして危機的状況に際して喚起されたネガティブな情動状態を、他の個体とくっつく、あるいは絶えずくっついていることによって低減・調節しようとする行動制御システムである(遠藤, 2005)。そして、子供はそれを活用して様々な事態に対応し、愛着対象を安全基地としながら探索行動をしていくのである。Bowlby はさらに、重要な他者との近接の可能性といった関係性は、年齢を重ねるにつれ、それまでの経験によって自己と他者に関する「内的作業モデル」(Internal Working Model : 以下 IWM とする) を形成していくと述べ、遠藤は「人はそのモデルを適宜想起し、活用することによって、その時々々の危機的状況にうまく対処し「自らが安全であるという感覚」および心身状態の恒常性を保持していく」としている。子どもにとっての重要な養育者はその家族である場合が多く、親子関係や家族の養護性を考えるうえで愛着は重要な要素のひとつと考える。

このように、愛着のシステムは養護・養育において重要な役割を果たしているが、それでは愛着システムと養護性のシステムを同類として考えてよいのだろうか。そのことについて数井(2002)は、愛着のシステムと親の養育システムについて、両者の関連の深さを認めつつ、親の養育行動の基盤を独自性を保っている行動システムの一つとして捉え、論考している。その中で、George & Solomon (1996, 1999) の理論を紹介し、「養育表象システムは、その発達の根源を子ども時代の愛着関係

* 文学部心理教育学科資料室

** 老年心理研究室

*** 発達心理研究室

**** 教養部情報処理研究室

***** 國學院大学

の文脈における自己と他者についての内的作業モデルを持つが、標準的な条件下では、愛着システムとは別個に養育表象システム自体が発達する”とし、養育についてのIWMの構築は、愛着のIWMの構築と対応して進行するとしている。つまり、養育システムは愛着システムと呼応しながらそれぞれ独自の発達をとげつつ、一方のシステムの変化が他方のシステムの変化を促す可能性を持つということである。

しかし、愛着を基盤としたIWMは加齢にともない安定していくとされており、さらに、愛着の世代間伝達という、親の愛着と子どもの愛着の相似性についての研究も報告されている。数井・遠藤・田中・坂上・菅沼(2000)は現在の親の愛着とIWMが子の愛着にどのように影響を及ぼしているのか50組の母親と幼児に対して、母親には“成人愛着面接”(Adult Attachment Interview)を用いて愛着表象を、また、幼児には愛着Qセット法(AQS)を用いて愛着行動を測定し、親のIWMと子どもの愛着の連続性について、検討を行っている。その結果、親の愛着表象が安定していると、その子どもの愛着も全般的に安定したものになりやすく、不安定型の母親の子どもは安定性が低いという結果を示した。

また、藤井(1994)は、Parental bond(親と子のきずな)をどのように回想するかということが、現在の母子関係についてどのように影響するかということについて検討している。それによれば、“両親から愛され、自律を奨励されてきた人は、親役割を受容し、育児ストレスが低く、子どもとのbondも強く、また、両親から愛情のある統制を受けてきた人は、社会的志向が強いため、育児との葛藤が高く、配偶者に対する不満も強かったが、子どものことは受容しておりbondも形成されていた。また、親から愛情のない統制を受けてきた人は、親であることに自信が持てず、子ども発達も懸念し、配偶者への不満も高く、ストレスが最もとともに、子どもとの情緒的なbondが形成されにくいと感じている傾向が見られ、親から関心を払われず、拒否されてきた人は、ストレスが高くも低くもなく、育児にまつわる訴えは少ないが、子どもとのbondはうまく形成しにくく、母子関係が調和的でない可能性が示唆された”としている。

こうした結果から、愛着の質が世代を超えた連続性を持つと結論付けるのは、早いように思われる。これらの結果は、生涯を通じて、世代を超えて伝達していくもの

と解釈するよりは、現在の親の愛着表象が子どもの愛着にどのような影響を与えているか、親の現在の心的状態が子の現在の状態に影響を与えるというものを表し、IWMが一般的に高い時間的連続性を有するという仮定の上に世代間伝達の推論が成り立っている(数井, 2005a)と思われるからである。そして、養育システムや愛着がどのように発達していくのか、各世代に違いが見られるのかどうか、様々な年代を対象として行われた研究は少ない。

そこで、本研究では家族の機能である養護性が個人の生涯を通じてどのように形成発達していくのかについて、主に養育行動、養護性と親子間の愛着との関連から検討する。とくに、各年代によって親の養育行動や、愛着表象に違いが見られるのかどうか、違いがあるとすればそれは加齢に伴うものなのか、それともその世代特有のものなのかどうかといった親子関係に関する表象の年代的・世代的变化についての検討を行うことを目的とする。

方 法

分析対象

首都圏のA女子大学、短期大学(旧制高等専門学校を含む)を卒業した女性4200名のうち、返答のあった979名(20歳~92歳。ただし、92歳の者は、1名だったので80代に含んだ)。全体の回収率は23%であった。

手続き

A女子大学同窓生から、20代800名、30代800名、40代700名、50代550名、60代550名、70代600名、80代200名、計4200名を同窓会名簿から無作為に抽出し質問紙を郵送、記入後返送を依頼した。

質問紙

フェイスシートをはじめ、理想の生き方、夫婦関係、現在の愛着(IWM尺度)、就学前の母子関係、親の養育態度(PBI)、青年期の親への愛着(IPA)、親と自分との関係、老いてくる親への世話についての態度や気持ち、自分自身や親の高齢化に伴う意識・生活に対する希望、生きがい、および自分自身の子育て行動・感情の項目の計265問である。

本報告では、現在の愛着(IWM尺度)と就学前の母子関係、親の養育態度(Parental Bonding Instrument以下PBIとする)、青年期の親への愛着(Inventory of Parent and Peer Attachment以下IPAとする)について取り上げることとする。

現在の愛着 (IWM 尺度) は, Hazan & Shaver (1992) の質問紙を参考に詫摩・戸田 (1988) が作成した内的作業モデル尺度 (以下 IWM 尺度とする) を使用した。これは, secure (安定) 項目, avoidant (回避) 項目, ambivalent (アンビバレント) 項目, 各 6 項目, 計 18 項目で構成される。また, 就学前の母子関係については, 酒井 (2001) の就学前の母子関係尺度を使用した。これは, 就学前の安定的な母子関係 6 項目, 就学前の拒否的な母子関係 5 項目, 就学前のアンビバレント的な母子関係 5 項目の計 16 項目からなる。この中から, 被験者の負担を考慮し, それぞれの因子ごとに, 因子負荷量の高かった上位 3 項目を選択, 計 9 項目を使用した。両尺度とも, 「1. 全くあてはまらない」から「6. 非常によくあてはまる」までの 6 段階法で, 自分に最もあてはまるものに○をもらう形式を用いて回答を求めた。

IPA については, Armsden & Greenberg (1987) が青年期の愛着を測定するために作成した Inventory of Parent and Peer Attachment のうち両親への愛着を査定する Section 1 を藤井 (1994) が回想法に修正した 28 項目を参考に, さらに文体等を修正し作成した 28 項目を使用した。「1. 全く当てはまらない」から「6. 非常によくあてはまる」の 6 段階法で回答を求めた。

PBI については, Parker, Tupling & Brown (1979)

が作成した Parental Bonding Instrument 25 項目を使用した。PBI の日本語訳は, 藤井 (1994) の訳を参考にした。評定段階数は原著と異なり「1. 全くあてはまらない」から「6. 非常によくあてはまる」の 6 段階法で回答を求めた。

実施時期

2004年10月～12月である。

結 果

(1) 各尺度得点の算出

本研究では, 各尺度について, それぞれ尺度に含まれる項目の得点を加算し, それらを項目数で除したものを各尺度得点とした。各尺度の平均と標準偏差については, 表 1 の通りである。各得点の範囲は全て 6 段階評定であるため, 1～6 点の間の値となっている。

i) 内的作業モデル尺度について

安定, 回避, アンビバレントの 3 尺度について得点を算出した。それぞれの項目については, 詫摩・戸田 (1988) に従った。各尺度とも 6 項目である。各年代別の平均値および標準偏差については, 表 2 に示す。

ii) 就学前の母子関係について

表 1 : 各尺度の平均と標準偏差

	IWM 安定	IWM 回避	IWM アンビバレント	就学前の安定的な母子関係	就学前の回避的な母子関係	就学前のアンビバレント的な母子関係
N	876	890	881	912	911	850
平均	3.91	3.31	2.7	4.43	2.08	2.34
SD	0.74	0.67	0.71	1.02	0.96	0.91

	IPA 信頼	IPA コミュニケーション	IPA 疎外	PBI 情愛	PBI 依存期待	PBI 決定尊重
N	874	829	841	799	837	847
平均	4.39	3.42	2.71	4.34	2.39	2.97
SD	0.87	0.91	0.93	0.81	0.81	0.80

表 2 : IWM 尺度の年代別平均と標準偏差

年代	安定			回避			アンビバレント		
	N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
20代	100	3.80	.696	100	3.01	.727	101	3.09	.797
30代	119	3.92	.712	119	3.15	.629	118	2.79	.760
40代	148	3.92	.712	148	3.28	.653	149	2.83	.653
50代	123	3.85	.778	122	3.33	.634	121	2.70	.644
60代	158	3.98	.784	165	3.42	.692	163	2.52	.632
70代	172	3.99	.708	179	3.47	.583	172	2.48	.667
80代	32	4.06	.621	34	3.31	.657	32	2.32	.567

就学前の安定的な母子関係、就学前の回避的な母子関係、就学前のアンビバレント的な母子関係の3尺度について、酒井（2001）に従い、得点を算出した。各尺度とも3項目ずつである。各年代別の平均値および標準偏差については、表3に示す。

iii) IPA について

"親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ"における因子分析の結果、IPAは"両親は私の判断を信用してくれた"といった項目からなる「信頼」と、"私は両親に自分の悩み事や問題を話していた"といった項目からなる「コミュニケーション」と、"両親が察しているよりも私のイライラは激しいものだった"といった項目からなる「疎外」の3因子が抽出された。そこで、これら3因子を各尺度得点とした。各年代別の平均値

および標準偏差については、表4に示す。

iv) PBI について

"親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ"における因子分析の結果、"いつも暖かくて親しみのある声で話しかけてくれた"と言った項目からなる「情愛」と、"私のことを、父・母がいなければ自分のことは何も処理できないと思っていた"といった項目からなる「依存期待」と、"私の望みのままに自由にさせてくれた"といった項目からなる「決定尊重」の3因子が抽出された。この結果は、Parkerら（1979）との結果とは異なるため、彼らのように尺度の点数でタイプ別に分けることはせず、これら3因子をそれぞれの尺度得点として扱うこととした。各年代別の平均値および標準偏差については、表5に示す。

表3：就学前の母子関係尺度の年代別平均と標準偏差

年代	就学前の安定的な 母子関係			就学前の回避的な 母子関係			就学前のアンビバレント 的な母子関係		
	N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
20代	99	4.66	.929	101	2.22	1.03	100	2.70	1.08
30代	118	4.66	.888	119	2.14	1.03	118	2.44	.879
40代	151	4.26	.984	151	2.17	.889	149	2.42	.857
50代	126	4.34	.995	125	2.05	.904	120	2.35	.923
60代	176	4.28	1.12	173	2.03	1.04	148	2.18	.842
70代	177	4.50	1.03	183	1.96	.844	159	2.22	.898
80代	38	4.46	1.00	34	1.83	.767	31	1.89	.635

表4：IPAの年代別平均と標準偏差

年代	N	信頼		コミュニケーション		疎外			
		平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
20代	99	4.35	.899	95	3.46	.993	96	3.10	1.01
30代	117	4.21	.892	119	3.34	.832	116	2.99	.873
40代	146	4.07	.855	144	3.10	.885	145	2.95	.926
50代	114	4.36	.830	109	3.34	.817	115	2.70	.933
60代	168	4.62	.804	155	3.62	.960	156	2.38	.786
70代	170	4.59	.840	152	3.55	.872	161	2.44	.845
80代	34	4.59	.758	31	3.83	.995	31	2.24	.798

表5：PBIの年代別平均と標準偏差

年代	N	情愛		依存期待		決定尊重			
		平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD
20代	93	4.33	.826	95	2.47	.861	96	4.06	.888
30代	115	4.33	.791	116	2.60	.919	118	3.86	.861
40代	139	4.08	.783	141	2.55	.797	144	3.84	.875
50代	101	4.27	.768	114	2.44	.760	112	3.92	.756
60代	148	4.53	.817	160	2.20	.817	162	4.00	.761
70代	156	4.48	.785	160	2.22	.724	161	4.10	.726
80代	29	4.37	.886	30	2.15	.537	31	4.01	.687

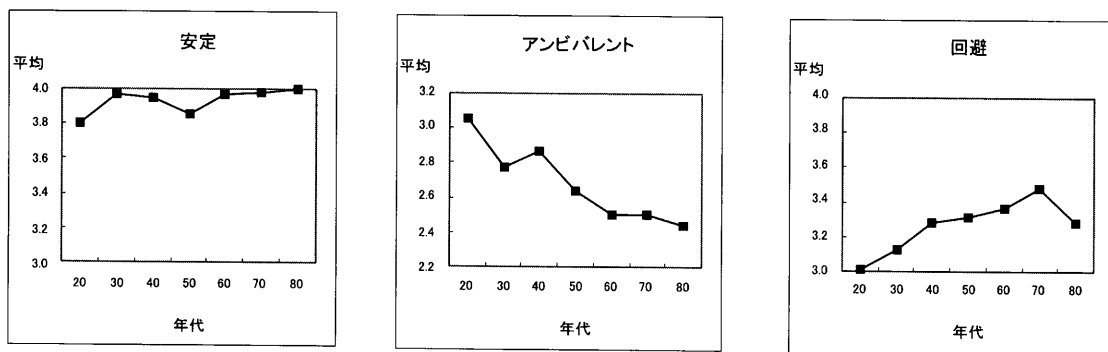


図1：IWM年代別グラフ

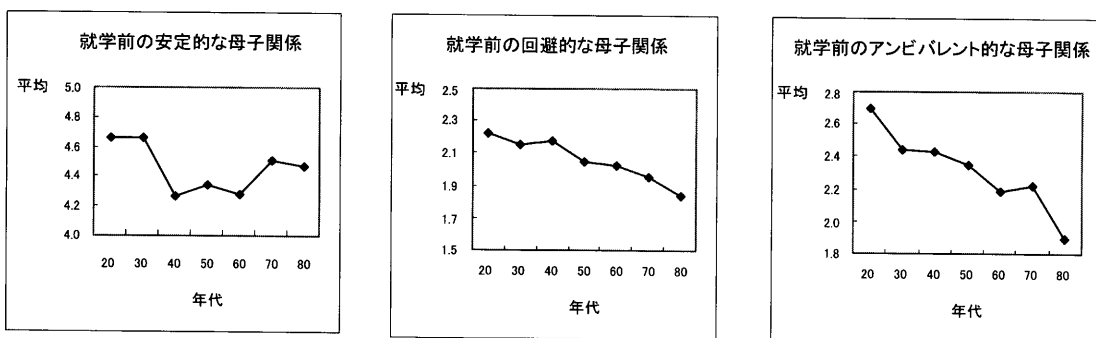


図2：就学前の母子関係尺度の年代別グラフ

(2) 内的作業モデル尺度の年代差について

20代から80代の各年代について、尺度得点の平均を求めた。図1に平均の違いをグラフ化したものを示す。

これらを見ると、アンビバレントにおいて、年代が上がるにつれ、平均値が低くなっていることが分かる。一方回避は、70代まで徐々に上がり、80代で少し下がっていた。一元配置分散分析をおこなった結果、アンビバレントと回避において有意であった ($F(6,849) = 13.43, p < .001$ $F(6,860) = 7.52, p < .001$)。安定については有意差がなかった。さらに、アンビバレントについて、F検定の結果有意であったため、等分散を仮定しないTamhane法を用いて多重比較を行った結果、20代と50, 60, 70, 80代において、30代と60, 70, 80代において、40代と60, 70, 80代において、年代が低いほど、平均値が有意に高かった。回避については、Tukey法を用いて多重比較を行った結果、20代と40, 50, 60, 70代において、30代と60, 70代において、年代が高いほど平均値が有意に高かった。

(3) 就学前の母子関係の年代差について

就学前の母子関係について、各年代の尺度得点の平均値を求めグラフ化した(図2)。

就学前の安定的な母子関係に関しては、U字型に近いグラフを示し、就学前のアンビバレント的な母子関係、就学前の回避的な母子関係においては、年代があがるにつれ平均値が下がるグラフを示した。

各年代によって平均値に差があるか比較するために、一元配置分散分析をおこなったところ、就学前の安定的な母子関係と就学前のアンビバレント的な母子関係において有意差があった ($F(6,878) = 3.48, p < .01$ $F(6,818) = 5.587, p < .001$)。就学前の回避的な母子関係について有意差はなかった。そこで、就学前の安定的な母子関係について、Tukey法を用いて多重比較を行った結果、20代と40代、30代と40, 60代において、年代が低いほど平均値は有意に高かった。

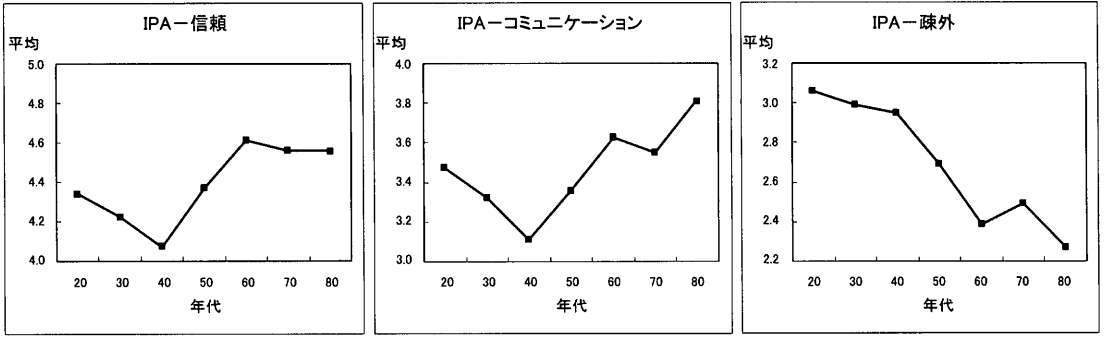


図3：IPA 年代別グラフ

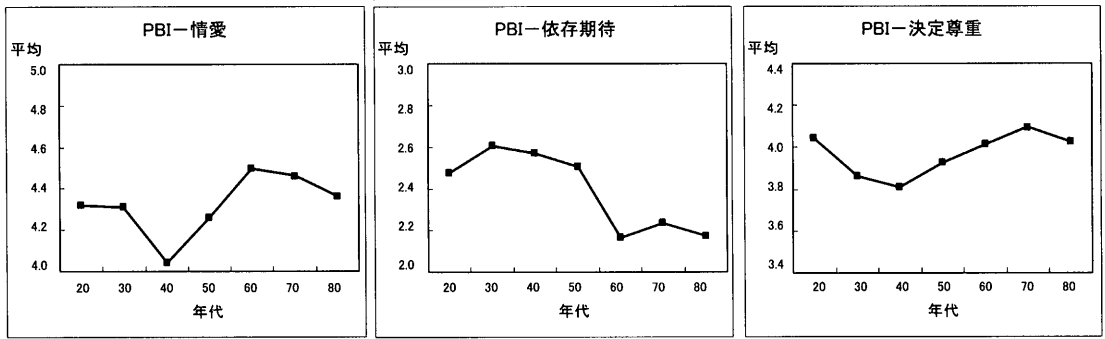


図4：PBI 年代別グラフ

(4) IPA の年代差について

IPA の各尺度得点について各年代で平均値を算出しグラフ化した(図3)。

各尺度において年代別の平均値に差があるかどうかをみるために一元配置分散分析をおこなったところ、信頼、コミュニケーション、疎外のいずれも有意差があった($F(6,841) = 8.42, p < .001$ $F(6,798) = 6.38, p < .001$ $F(6,813) = 14.38, p < .001$)。全ての尺度について Tukey 法を用いて多重比較をおこなった結果、信頼は30代と60, 70代において、40代と60, 70, 80代において、年代が低いほうが、平均値が有意に低かった。コミュニケーションでは、40代と20, 60, 70, 80代において40代は有意に平均値が低かった。疎外では、20代と50, 60, 70, 80代において、30代と60, 70, 80代において、40代と60, 70, 80代において年代が若いほど、有意に平均値が高かった。

(5) PBI の年代差について

PBI について各年代の平均値を求め、グラフ化した(図4)。次に、各年代によって平均値に差があるか比較するために、一元配置分散分析を行ったところ、決定尊重を除いた情愛と依存期待において有意であった($F(6,774) = 4.77, p < .001$ $F(6,809) = 5.67, p < .001$)。

情愛について Tukey 法を用いて多重比較をおこなった結果、40代と60, 70代において40代は有意に平均値が低かった。依存期待においては、F 検定において有意であったため Tamhane 法を用いて多重比較をおこなった結果、30代と60, 70, 80代において、40代と60, 70, 80代との間において、年代が低いほど平均値が有意に高かった。

考 察

現在の IWM をみると、安定については年代による差はみられなかった。安定は、"自分は人に受け入れられている" という、内的作業モデルを持っていることを指す。こうしたモデルは、年齢によって差はないようであ

る。しかし、有意差はないものの、若干20代、50代で他の年代に比べ、共に数値が低くなることは興味深い。この2世代は、ほぼ親子の関係にある世代である。子供の巣立ちによる人間関係の変化の影響か、親子間の世代間伝達の可能性が考えられる。また、“人に受け入れられるかわからない”といったIWMを有するアンビバレントについては50代を境にして、20・30・40代と60・70・80代において、50代は20代と80代との間で、若年世代の方が、平均値が高いことが示された。そして、“人に受け入れられなくてもかまわない”といったIWMを有する回避においては、20・30・40代と60・70・80代との間において、年齢が高い世代ほど平均値が高いことが示された。このことについて、15歳から54歳という年齢の成人のアタッチメントスタイルを調査した結果では、アンビバレントは45歳～54歳の群で最も低く、若い方で高いという結果が示されている。さらに、回避型では全体の年齢でほとんど差がなかったことが示されている(Mickelson, Kessler, & Shaver, 1997)。また、Diehlら(1998)は、若い成人の回避型は16%なのに対して、老年期の人の回避型は37%であったと報告している。今回の調査はこれらの研究と似た結果を示したといえる。回避得点が上がっていくことは、加齢によって親しい人を失っていくことにより、それに対応するために回避傾向が強まっているのではないと思われる。IWMは基本的に人生早期に重要な養育者との関係性によって形成され、それが加齢とともに変容しづらくなっていくと言われているが、老年期に入るにつれ、親しい人を亡くしていくという、喪失感の対処として、“孤独を受け入れていく”といった適応した状態に変化していくことを示しているのかもしれない。

就学前の母子関係においては、就学前の安定的な母子関係において、40・60代が若い世代よりも低い値を示し、就学前のアンビバレント的な母子関係においては、20代と60・70・80代の間において、20代が高い値を示した。80代は低い値を示していた。就学前の回避的な母子関係においては、年代で差はなかった。とくに、就学前の安定的な母子関係について、40代が最も低い平均値を示していることは、PBIの情愛、IPAの信頼、IPAのコミュニケーションの値において、40代がもっとも低い値を示していることと重なり、興味深い。IPAは青年期の愛着を、PBIは親の養育態度を回想して問うものである。これらから、40代は、就学前、青年期を通して、両親や

母親に対して情愛や信頼やコミュニケーションがあったとはとらえていないようである。40代は、1950年代後半から1960年代前半に生まれた人々である。世帯人数別の世帯数の推移(厚生労働省, 2000)をみると、6人世帯以上の割合は1953年から急激に下降している。これらは、家族の形態が従来の伝統的な家族形態から変化を遂げてきていることを示しているように思われる。世帯人員が変わることは、それに伴って子育てや家族観も変化している可能性が推察される。柏木(2003)は、“家族というものは、家族成員の変化や相互作用によって変化するだけではない。家族内の変化以上に、家族を取り巻いている歴史的な社会状況から常に刺激を受け、家族のかたちも機能も変化を余儀なくされている”とし、“人間の家族が外に向かって開かれたシステムであり、外側の状況に応じて家族のかたちも機能も柔軟に変化させることに、人間の家族ならではの特質がある”と述べている。PBI、IPAにおいて、各世代の平均値のグラフが直線的には変化していないことから、この年代差は加齢に伴う変化というよりも、社会の状況が変化することによって生まれた、世代の違いを反映していると解釈することが自然であると思われる。これらは、PBI依存期待とIPA疎外について60代以上が低く、50代以下の年代では高い平均値を示していることにも表れているように思われる。戦後10年以上を経て生まれた世代は、戦前、戦中の世代と比べて、親の依存期待が強くなり、青年期における疎外感も強くなっていることを示している(西村他, 2005)。その背景には、少子化や核家族化が進んだことなどが影響しているのではないだろうか。また、戦前、戦中世代は戦争という外部脅威の影響が大きかったとも考えられる。個人的な親子関係で、たとえ情愛がなかったとしても“あの時代では仕方なかった”といったことで、自分を納得させることができるのかもしれない、むしろ平和なときのほうが、個人特有の子育てが意識されるのではないだろうか。数井(2005b)は“アタッチメントが安心・安全の度合いを問題にしていることを考えれば、そこに脅威を与える要因が、子どものアタッチメントの発達に影響を表すことが考えられるだろう”と述べている。これらのことから今回の調査では、世代の違いがこうした平均の違いをもたらしたものと推測する。ただし、これはあくまでも仮定であり詳しくは縦断研究によって検討すべきである。

さらに、現在のIWMと就学前の母子関係、PBI、

IPA のグラフ曲線が違っていたことは、現在の IWM はかつての両親の養育態度や愛着とはかならずしも一致しない可能性を示唆している。この結果の違いは、ここで取り上げた IWM が、何を測っているのかといった測定の問題も含んでいるものと考えられる。それは、愛着が重要な他者との間に結ばれる情緒的な絆としながらも、IWM 尺度では特定の他者を対象にして問いかけてはいないからである。研究方法として質問紙だけでなく、インタビュー法なども取り入れ、総合的に捕らえていくことも大切なことと思われる。

今後の課題としては、各尺度とも加齢に伴う大きな変化はないのか、それとも加齢にともない変化するものなのかといったことを明らかにするために、縦断的な調査の必要性が示唆される。またインタビューなどを用いて、個人のデータを積み重ねることも大切である。

家族の変化や問題は高齢化社会や少子化が進むに連れ、模索する日々が続いている。それらの解決にむけての方法も試行錯誤が続いているといえる。過去の親子関係の認識や、現在の内的作業モデルに変化があるとすれば何が変容要因になるのか、各世代や社会的な要因の影響を受けているとすればその時代、世代が迎える問題についても予測が可能になるかもしれない。それらが現在の家族の問題と言われるものにどのような新しいアプローチのアイデアをもたらしていくのか、検討していくことが必要であると思われる。

謝 辞

本論文作成にあたりご指導ご助言をいただきました、東京家政大学井森澄江助教授、井上俊哉助教授、西村純一教授に深く感謝申し上げます。また、本研究にご協力いただきました東京家政大学緑窓会の皆様に厚く感謝申し上げます。

引用文献

- 安治陽子 2004 II. 家族・家庭 社会福祉法人 恩寵財団 母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所(編) 日本子ども資料年鑑2004 KTC 中央出版 p63.
- Armusden,G.C. & Greenberg,M.T. 1987 The inventory of parent and peer attachment: Individual differences and their relationship to psychological wellbeing in adolescence, *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 427-454.
- Bowlby,J. 1969 *Attachment and loss: vol.1 Attachment*. NewYork: (黒田実郎ほか訳 1976母子関係の理論 1:愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby,J. 1973 *Attachment and loss: vol.2 Sparation: Anxiety and anger*. NewYork: (黒田実郎ほか訳 1977 母子関係の理論 2:分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby,J. 1980 *Attachment and loss: vol.3 Loss: Sadness and depression*. NewYork: (黒田実郎ほか訳 1981 母子関係の理論 3:愛情喪失 岩崎学術出版社)
- Diehl,M., Elnick,A.B., Bourdean,L.S. & Labouvie-Vief,G. 1998 Adult attachment styles: Their relations to family context and personality. *Jornal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1656-1669.
- 遠藤利彦 2005 第1章 アタッチメント理論の基本的枠組み 数井みゆき・遠藤利彦(編) アタッチメントー生涯にわたる絆ー ミネルヴァ書房 1-31.
- George, C. & Solomon, J. 1996 Representational models of relationships: Links between caregiving and attachment. *Infant Mental Health Journal*, **17**, 198-217.
- George, C. & Solomon, J. 1999 Attachment and caregiving. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment* (pp. 649-670). New York: Guilford
- Hazan,C. & Shaver,P.R. 1987 Romantic love conceptualized and an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 藤井まな 1994 Parental bond に関する基礎的研究ー育児ストレスとの関連性ー 関西学院大学教育学科研究年報, **20**, 89-103.
- 柏木恵子 2003 家族心理学ー社旗変動・発達・ジェンダーの視点ー p32-33.
- 数井みゆき 2002 養育システムの発達と愛着システム 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学,芸術), **51**, 45-63.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 2000 教育心理学研究, **48**, 323-332.
- 数井みゆき 2005a 第7章 親世代におけるアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦(編) アタッチメントー生涯にわたる絆ー ミネルヴァ書房 174-208
- 数井みゆき 2005b Topic10-2 外部脅威とアタッチメン

- ト 数井みゆき・遠藤利彦（編） アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 p265
- 厚生労働省 2000 国民生活基礎調査
- Mickelson,K..D., Kessler,R.C., & Shaver,P.R. 1997 Adult attachment in a nationally representative sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1092-1106.
- 西村純一 井森澄江 井上俊哉 大井京子 2005 親子関係の生涯発達心理学的研究（4）第47回日本教育心理学会発表論文集, 214.
- Parker,G., Tupling,H. & Brown,L.B. 1979 A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.
- 酒井 厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, **9**, 59-70.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度：成人愛着スタイル尺度作成の試み, 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.

Abstract

The subjects of the survey are 979 females varying in age from the 20s to the 80s. A postal survey was sent to 4200 fellow students of a women's university in the Tokyo Metropolitan area, and the recovery ratio was 23%. This study was carried out as a part of a life-span development psychological study of parents and their children. The purpose of this paper was to examine features of attachment and parental child-rearing attitude from the perspective of an age difference. The result indicates that parental child-rearing attitude varied according to a generation. The parental child-rearing attitude in age of 40s was low score when compared to other generations. Ambivalent attachment differed when comparing the 20s-to-40s group with the 60s-to-80s group.